

平成21年11月の解説（週間天気予報）

【11月の天候状況】

上旬は1日に前線をともなった低気圧が北日本を東北東進し、ほぼ全国的に雨となりました。その後強い寒気が流入したため、旬前半は各地とも低温となりましたが、後半は全国的に高気圧に覆われ晴れの暖かい日が続きました。10日は低気圧の接近により西日本を中心に雨が降り、とくに11日にはこの低気圧が西日本から東日本を通過して全国的に雨となり、西日本では記録的な大雨となった所がありました。その後も中旬には低気圧が次々と日本付近を通過したため、全国的に雨の日が多くなりました。下旬は本州付近を低気圧と高気圧がほぼ1日おきに通過し、北日本から西日本にかけては天気が短い周期で変化しました。南西諸島では前線などの影響で曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間は全国的に少なく、とくに北日本ではかなり少なくなりました。降水量は全国的に多くなりました。とくに西日本ではかなり多くなり、月降水量の多い記録を更新した気象官署がありました。気温は東北、関東・甲信、北陸地方と沖縄地方で高くなりました。

【11月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）と同じ72%でした。北海道地方では例年より8ポイント高くなりましたが、東日本では2から5ポイント低くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、北日本と北陸、沖縄地方で例年をより0.3から0.5小さくなりましたが、九州地方では0.2から0.3大きくなり、全国平均は例年より0.1小さい2.2でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国的に例年より小さくなり、とくに北陸地方と九州南部地方では0.5小さくなりました。全国平均では例年より0.2小さい2.0でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の週間天気予報から】

11月10日、東シナ海に進んできた低気圧の影響で西日本で降りはじめた雨は次第に東日本へと広がり、翌11日、東京ではほぼ一日雨となりました。この11月11日を対象とした週間天気予報について振り返ってみます。

7日前の11月4日発表の週間天気予報に使用した11日の予想図では、九州付近に低気圧が予想され、東北地方から九州、沖縄・奄美にかけての広い範囲に降水が予想されています（図1参照）。この予想をもとに、11月4日発表の東京地方の7日目予報（11日を対象）では「曇り一時雨」と予報しました。翌日以降の予想資料でも11日はほぼ一貫して低気圧の通過に伴う降水が予想されたことから、その後の週間天気予報でも11日発表の今日

予報に至るまでの間、一貫して雨を予報することができました。気圧の谷の予想が明瞭で、その通過タイミングも比較の見積もりやすい場合には、このように早い段階から雨を予報することができます。

しかし、多くの場合、7日目予報から雨を適確に予報することは難しいのが現状です。今回例として示した11日の雨の後、11月下旬にかけては本州南岸を低気圧が頻繁に通過したため、特に南岸低気圧の影響を受けやすい東日本の太平洋側で雨日数が多くなり、東京では11月の雨日数（日降水量1mm以上の日数）が平年（6.2日）の倍にあたる、13日に達しました。これに対して週間天気予報で7日目予報から雨の予報を一貫して発表することができたのは、上記事例を含めて3回だけでした。

気圧の谷の通過は予想することができても、それが雨に結びつくかどうか等の影響度合いや、天気崩れるタイミングが変化するため、それまでに発表していた予報を修正して発表することもあります。できるだけ最新の予報をご利用ください。

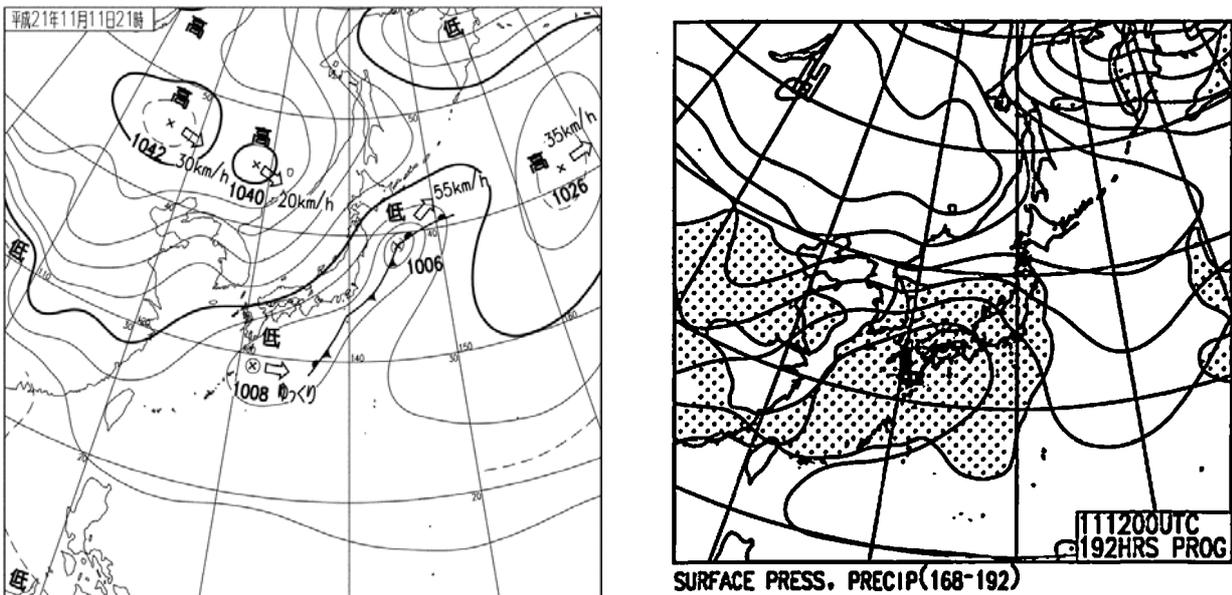


図1 2009年11月11日21時の地上天気図(左)と、7日目の予報でこの日の予報に用いた地上予想図(右。水玉模様は降水の予想)

【1月の週間天気予報の利用にあたって】

1月後半から2月前半にかけては、1年のうちで最も気温が低い時期です。強い冬型の気圧配置となって強い寒気が日本付近まで南下してくると、西日本の平野部でも氷点下になることがあります。気温が氷点下になると地表面の水分が凍り、最高気温が上がらないと氷はなかなか溶けません。この状態が何日も続くと凍結による被害が拡大します。週間天気予報で気温が低い状態が続く予想となっているときは、特に最新の情報に注意して、低温に対する早めの対策を怠らないようにしましょう。